桜建会報 OKEN

2014-March
No.99

日本大学桜門建築会
http://www.okenkai.jp/

NETHERLANDS→
HONG KONG

「特集／日本を飛び出した桜建人」より

U.S.A.

U.K.→CHINA

BELGIUM→
FRANCE→POLAND

GERMANY

ITALY→U.K.

INDIA

contents

特集／日本を飛び出した桜建人——2
田中伊都名　黛直矢　中上裕佳子　安藤真由子　坂上誠　三浦洵　岩﨑雅則
研究室紹介——11
蜂巣研究室　大内研究室
斎藤賞・加藤賞・桜建賞平成25年度受賞者一覧——12
事務局だより——14
学部ニュース——15

特集

日本を飛び出した桜建人

留学した人、仕事をしている人からの報告

最近は、海外へ留学する学生が少なくなっているそうだ。グローバル社会といいながらも、実際に国外へ踏み出す人は限られている。もし、海外での生活に対する不安が原因ならば、実際に海外に出た人たちの声を聞けば、もっと興味がもてるのではないだろうか。

海外に拠点を移し仕事や勉強をした人は、旅行するだけでは得られない経験を重ねている。今まで自分が生まれ育った場所と異なる人やことば、地形や気候、伝統や文化との濃密な接触は、人との関係やものの見方などに変化をもたらし、人生における大きな財産を形成する。もちろん、外国で仕事や生活することは楽しいことだけではなく、多様な現実に直面するものだろう。

今回の特集では、実際にアジアや欧米などで活躍する卒業生や学生の方がたが体験した、そうしたリアルな社会の様子や仕事の実情を紹介する。

すべてがチャレンジ、原動力は限りなき探究心

田中伊都名（劇場コンサルタント、1994年大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了）

大学院理工建築学専攻（小谷研）⇨イタリア留学⇨帰国・新国立劇場勤務⇨英国研修⇨ロンドンで劇場コンサルタント

英国で研修後、劇場コンサルタントに

日本からイギリスにベースを移して約6年になる。

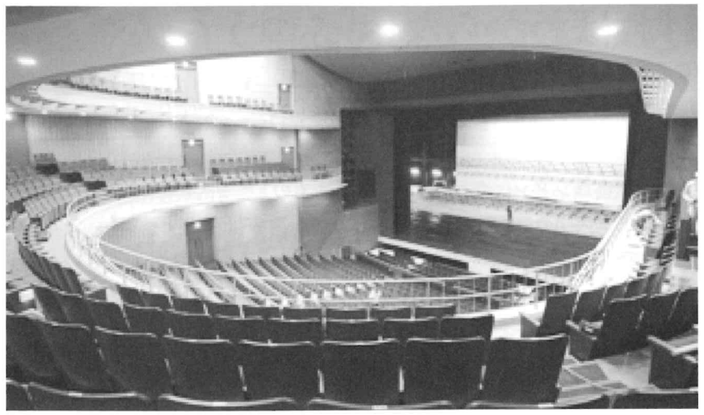
渡英は、日本政府の文化庁若手在外研修員制度にて、ロイヤルオペラハウス、コヴェントガーデン（以下、ROH）に1年間滞在したことに起因する。私が研修した年はROHにとっても特別な1年で、オペラを代表する演目「リングサイクル」一挙上演という国をあげての特別企画があった。結局、4演目制作は、1年6か月を費やしたが、残りの6か月は野村財団からのサポートもあり、非常に有意義な研修期間を過ごすことができた。このころと前後して、川崎市の昭和音楽大学の新しいキャンパス内のオペラハウス「テアトロ・ジーリオ・ショウワ」を始めとする、リサイタルホール、オペラリハーサルスタジオなどの施設の劇場コンサルタントという大役の任を与えられ、ホール開場時にはテクニカルディレクターとして、学生の公演に携わった。この時の経験、そして、ROHの滞在をきっかけに、英国での劇場建築、劇場コンサルタントのビジネスに強い興味をもち、現在に至っている。

学生時代に魅了された劇場建築

今でも、学生時代に試行錯誤していた時のことを思い出す。大学院博士前期課程に在籍のころから、故小谷喬之助名誉教授、本杉省三教授のもとで、本格的に劇場建築を学んだ。と同時に、当時の日本はホール建設ラッシュで、新国立劇場を始めとする文化施設のコンペティションの最盛期であった。小谷研究室の学生だった私もあちこちの建築事務所で、劇場設計のプラクティスをさせていただいた。

この時の経験と、イタリアの劇場の客席形態の形状について調べていた修士論文作成の過程が、今の仕事に非常に役立つことがある。あのころは、将来の仕事に役に立つのかなど自問自答したこともあったし、劇場という特殊な建物を設計・計画する機会にどうやったら巡り会えるのだろうとぼんやり考えていた。でも、劇場建築に魅了されてしまっていたのである。そして、次のステップへと動き出した。

修士修了後、しばらくは東京で劇場コンサルタントの卵として働いていたが、劇場建築熱が嵩じて、イタリア政府給費生として、フィレンツェ大学建築学部に籍をおくこととなった。私にとってはこれが初めての海外生活の経験で、3年間という短い時間ではあったが、学生として海外で生活することは、本当に楽しいことばかりだった。イタリア語の勉強、大学での授業、友人の建築家と一緒になって納屋を住居に改造する仕事、オペラの装置デザインやイタリアのオペラカンパニーと一緒に海外引越し公演をしたり。なにごとも体当たりで取り組んだ。



左／昭和音楽大学 テアトロジーリオショウワの客席内部。上／ロンドンでの仕事の一例。イスタンブールの劇場（2013年完成）のサイトライン、客席設計を担当

イタリア留学を経て実務を経験

イタリアの留学は、世界を体験するための一歩と考えていたので、予定の時間が満了すると直ちに帰国し、海外で仕事をすることなどまったく考えていなかった。

帰国後、新国立劇場・舞台技術部に勤務した。日本の舞台人、そして、恩師が情熱を傾けた劇場計画の竣工時に立ち会えたことは、かけがえのないことであった。そこでは特に、オペラ演目を担当し、一見、劇場建築から離れたように思われるが、実は、この時こそが本当の実務体験であった。実際、東京にいながらほとんどの時間を外国人の芸術家とオペラをつくることに費やした。日本での社会常識などまったく通用しない空間に居合わせてしまったのである。自分の能力を120%フル活用しても、まだ足りないくらいの刺激的な仕事であった。

さらなる挑戦へ

現在、ロンドンでは劇場コンサルタントとして、主に客席のデザイン、サイトライン計画、バックステージ設計、舞台技術設計などを行っている。英国では改修物件がほとんどで、新しい劇場は、中近東、中国、南アジアなど海外物件がほとんどである。それらは、現地の建築家とコラボしながら設計を行う。まれに、慣習の相違から生じる鬼気迫る交渉の場面に直面することもあるが、それとともに、多様なバックグランドから生み出されるクリエイティヴィティの面白さも見逃すことはできない。

さらに、ひとつのプロジェクトで話される言語も多様で、英語以外にドイツ語、または、フランス語、加えて現地語といった具合である。もちろん、仕事の進め方もさまざま。いかに自分のデザインをクライアントとデザインチームに納得してもらうかが成功の鍵であり、常に、それぞれの分野でいろいろな方法のプレゼンを行っていく。すべてがチャレンジであり、限りない探究心が原動力である。

海外で仕事をして感じるのは、ヨーロッパの中でも特に英国は知識を重んじる社会で、日本は慣習を重んじる社会であること。これを踏まえた上で、今までの日本、イタリアでの経験が、ロンドンの多様性と混ざり合って、今後のさらなる挑戦にもつながっていくと考えている。近年は、建築の世界も国境にグラデーションがかかっていて、国の垣根を越えて、多くのプロジェクトが幅広く展開されている。若い日本人の世界での活躍を大いに期待したい。

昭和音楽大学テアトロジーリオショウワ工事現場。（右）筆者、（左）石野氏（鹿島建設の現場所長。日大理工学部建築学科卒の大先輩）

TANAKA Izuna
1994年に日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程を修了後、イタリア政府給費留学生としてフィレンツェ大学建築学部で学んでいる時にオペラの仕事を始める。 帰国後、新国立劇場舞台技術部に勤務し多くのオペラプロダクションを手がける。2004年には、文化庁在外研修員としてイギリスのロイヤ ル・オペラ・ハウス、コヴェント・ガーデンにてプロダクションマネージャーの研修をする。同時に神奈川県の昭和音楽大学テアトロジーリオショウワの劇場建築コンサルタントを勤め、07年5月に完成。ロンドン在住、劇場コンサルタント。 連絡先 izunatanaka@mac.com

海外に出なければわからない「ふつう」

黛直矢（建築設計、2004年理工学部建築学科卒業）

短大建設学科⇨理工建築学科（大川研）⇨英国留学⇨英国アトリエ事務所勤務⇨中国上海設計事務所勤務

漠然とした興味から海外へ

どんな理由であれ海外に出ることに不安があるのは当然で、日本で生活していればほとんどの人が国内で進学、就職するのが「ふつう」だ。インターネットで情報が入るとはいっても、その世界に飛び込むことには勇気がいる。ただ私がこれまで海外にいて感じたことは、その日本の「ふつう」がものすごく変わっていて、海外の「ふつう」は国外への進学・就職はもっと安易で、当たり前のように行われているということである。

理工学部建築学科を卒業して10年、海外生活を始めて10年目。大学卒業時は自分の未来がこうなるとは想像もできなかった。海外での生活、留学は自分には関係のない話だととらえていた。そのため海外に行くきっかけや、明確なプランがあったというわけでなく、ただ漠然と海外に対して興味があり、将来日本で「ふつう」に就職する前に海外で長期滞在をしてみたかった。外国語が得意であったとか、建築留学したという類のものではなかった。

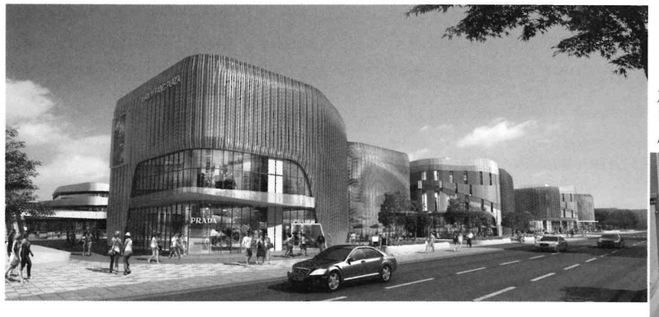
大学卒業後ロンドンに渡り、イーストロンドン大学の修士課程に進んだ。そこでの設計方法や思考は日本とは違い、とても有益な経験だった。なによりも驚いたことは、同級生は基本的に一度就職してから大学院に戻って建築を勉強していたのだ。日本の場合、「ふつう」は大学院までほぼ一貫して学び、一度就職したら修士課程をやりに戻ることはほとんどない。しかし、ここでは大学卒業後に仕事の経験を積み、数年後に修士課程に進む。大学院によっては仕事の経験がなければ進学できないところさえある。

社会へ出てから大学院が「ふつう」

こうした進路の最大の特徴は、各自がいったん大学を卒業して社会人として働き、そこでの経験を活かしてまた大学に戻ることである。新卒という考え方が基本的にない海外では、学生はこのように社会経験を積み、卒業後は即戦力として社会に出る。日本で毎年「ふつう」にみられる就職活動はほぼない。これは1度社会に出ることでその後の大学院での期間を有意義なものとする。もちろん就職にも役立つもので、日本にとっても、とても参考になると思った。

その後ロンドンの仕事を経験した後、中国上海の会社に勤め始めた。まだ建設ラッシュの続く中国は、建物を建てることが優先で、デザイン、技術面で確かに日本より劣っているところがあった。ただ、そのスピード感や、携わる仕事の種類は豊富で、大規模の仕事提案から現場監理まで、多くのことに携わることができる。仕事量が明らかに少ない日本では、経験しづらく、自分が設計したものが建つという経験を積むためには中国を含めたアジアでの仕事はとてもよい経験となっている。

今後はさらにグローバル化し、建築の舞台も常に新しいところへ動いていく。海外での仕事は確かに日本のものとは違った意味で苦労がある。しかし、新しいところへの挑戦は多くの発見を生み、自分自身を成長させてくれる。そしてなにより、離れたことでわかる日本の素晴らしさに、改めて気づかされている。



左／中国での担当プロジェクト。10万平米を超える建物の案件を年間に数件行うスピード感がある。下／大学の年度末レビュー風景。国も年齢も違う学生が各自のプロジェクトを展示する

MAYUZUMI Naoya
2004年理工学部建築学科卒業、同年渡英。07年イーストロンドン大学修士課程修了後アトリエ事務所勤務。09年より中国上海のHMA Architects & Designers 勤務。連絡先 mayuzumi@hmadesign.com

大事なのはエンジニアとしての能力

中上裕佳子（構造エンジニア、2000年大学院理工学研究科海洋建築工学専攻博士前期課程修了）

大学院理工海洋建築工学専攻（増田研）⇨ドイツ交換留学⇨ドイツ船級協会勤務

留学という無茶が仕事の意欲へ

1999年に日本大学理工学部とダルムシュタット工科大学の交換留学生としてドイツに渡り、現在はDNV GL社（旧Germanischer Lloyd社、ドイツ船級協会）にて石油プラットフォームや洋上風力発電所などの海洋構造物の査定業務に携わっています。独自の外力、構造計算を元に設計の安全性を第三者として証明するという仕事です。

ドイツに交換留学を決めた当時の私は大学院1年生でしたが、10年後にドイツで構造計算をしているとは夢にも考えていなかったように思います。帰国子女でもなく、英語は学校の勉強に加えて独学していましたが、ドイツ語はほぼゼロの状態での渡独でした。

今思えば無茶なことをしたものですが、無茶をするというのも大事だというのも事実です。1年間の交換留学期間は、多国籍の学生が暮らす巨大なカオスのような学生寮で水より安いビールで肝臓を鍛え、スラングのドイツ語を覚えてドイツ人とドイツ語で喧嘩をする程度の自信をつけ（相手が私の言ってることを理解したかは不明）、英語で修士論文を仕上げて修了しました。それでもドイツ語の授業にはついていけず、ドイツ人と対等にドイツで仕事をしていけるにはほど遠いという実感と悔しさが、その後もドイツに残って博士号を取得しようという意欲に直結しました。

コミュニケーション力と語学力

エンジニアとして外国で腕一本でやっていくには、英語などの国際言語と現地のことばでのコミュニケーション能力が必要とされます。コミュニケーションの能力は、イコール語学力ではありません。英語やドイツ語ができてもコミュニケーションが苦手な人もいます。また英語やドイツ語が不得手でも、不思議と外国人との意思疎通の上手い人もいます。エンジニアとしての能力が要求されることは、いうまでもありません。

渡独15年目の現在でも、私にはドイツ人とまったく同等のドイツ語の能力はありません。しかし異なるバックグラウンドをもった人とのコミュニケーション能力という点では、世界中どこに行ってもやっていける自信がつきました。これはダルムシュタット工科大学時代の学生寮での生活で養ったように思います。

剥きだしになる専門家としての能力

博士号に関しては、結果的に研究職ではなくエンジニアリングの仕事に就いた私にとっては、不可欠というものではありません。しかしドイツの大学で博士を取得する過程で得た自信は、仕事をしていく上でもプライベートの生活においても、大きな財産となっています。

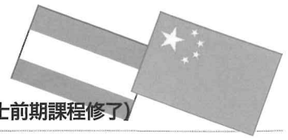
また、仕事をしていく上で非ドイツ人の、しかも女性としてのハンディを感じる場面もありますが、そんな時には取得した博士号がカバーしていると思えることもよくあります。ドイツ語圏はある意味階級社会であり、学歴社会でもあります。どこの大学を卒業したかではなく、なにを勉強して、どんな学位をとったか、ということが重要視されます。

外国に出て暮らすにあたって大事なことは、どこの国に行くかや、どの言語を習得するかではないと感じます。ことばが通じず価値観や文化の違う場所で暮らしていく中で、人の助けの大切さやことばが不自由な分、剥きだしになるエンジニアとしての能力を自覚し、日本の長所短所を客観的にみつめられることが財産になると思っています。

北海の石油プラットフォーム改築現場の視察

NAKAGAMI Yukako
1975年千葉県生まれ。2000年理工学研究科海洋建築工学専攻博士前期課程修了。1999年より2000年までドイツ・ダルムシュタット工科大学へ交換留学。ダルムシュタット工科大学博士号取得。04年より、DNV GL社（旧Germanischer Lloyd社）に勤務し、現在に至る。

偶然に都市計画を学んで



安藤真由子（都市計画家、2007年大学院生産工学研究科建築工学専攻博士前期課程修了）

大学院生産工建築工学専攻（曽根研）⇨オランダ留学⇨オランダランドスケープ事務所勤務⇨中国香港事務所勤務

受かったのは都市計画学科

私が日本を離れて、今年で６年目になります。

最初の２年間は、オランダのデルフト工科大学院で都市計画を学び、その後２年間当地のランドスケープ事務所で働き、現在は香港の事務所で仕事をしています。

私が、建築ではなく都市計画を勉強することになったのは本当に偶然でした。生産工学部の居住空間デザインコースで住居について学んだ後、引き続き建築の勉強をしたいと思い、オランダの大学院に出願しました。しかし、２年越しの出願で受かったのは建築学科ではなく、都市計画学科でした。

デルフト工科大学院の都市計画学科では、１年目は講義とスタジオを通して、都市または地域計画をグループで学び、２年目は個人で卒業制作を行います。

１年目のスタジオでは、オランダの都市計画をオランダ人の学生と組んで学ぶだけではなく、他国へ行き現地の大学教授と共同でプロジェクトを行うことができます。私は、アルゼンチンのブエノスアイレスへ赴き、現地の大学教授の講義を聞き、そして実際にプロジェクトを行いました。

知らない土地で生活し、他の学生と深夜までそこの背景を勉強し、その土地にふさわしい都市デザインを考えるのはたいへんですが、刺激がある毎日でした。

欧州各地のコンペに参加

都市計画学科 (Urbanism) を卒業してオランダの Urbanist のタイトルをもらい、オランダのランドスケープ事務所で働き始めました。ヨーロッパの都市計画は、都市計画家だけではなく、建築家またはランドスケープアーキテクトも携わることができます。ランドスケープ事務所が都市計画に関わる場合は、緑地計画や公共空間を軸として考えます。

事務所在籍中は、コペンハーゲン郊外の再開発、スイスの都市の公共空間計画などいくつもの国際コンペティションに関わることができ、デザインだけでなく、コンペティションにおける必要な表現法なども学ぶことができました。

また、ランドスケープ事務所なので、都市計画だけでなく、公園や広場のデザインなどにも触れることができ、現在でもランドスケープの仕事に携わっています。

国によって異なる利点

現在、私は香港の外資系 (オーストラリア) 事務所でランドスケープと都市計画の仕事をしています。私がオランダで働いている２年の間に、ヨーロッパ経済はいっそう悪化し、ヨーロッパの国籍をもたない人間が仕事を得ることはとても難しくなってしまいました。そこで、外資系企業が多く存在する香港で働くことにしました。香港で働くことは、オランダとは大きく違っていました。オランダではひとつのプロジェクトに長い時間をかけることができますが、香港では仕事のスピードが早く、またひとりで複数のプロジェクトを抱えなければなりません。しかしそれは、まだ実務経験が浅い私が、デザイン案をどんどん描かせてもらえるという利点でもあります。

海外で学び、働くことは時に厳しいこともありますが、それによりいろいろな考えをもつ人びとに出会え、想像もしていなかった分野やプロジェクトに関われることができています。

左／オランダのランドスケープ事務所では、天気のよい日は運河沿いのテラスにテーブルを運んで、みんなで昼食を楽しむ。上／香港の事務所内。毎週金曜日の 17 時からは、お酒を飲みながらプロジェクトのディスカッションをする

ANDO Mayuko
2007 年 大学院生産工学研究科建築学専攻博士前期課程修了。10 年 オランダデルフト工科大学院 Master of Science Faculty of Architecture 卒業。10～12 年 OKRA Landscape Architects (Utrecht / the Netherlands) 勤務。12～13 年香港の Agence Ouvray で勤務。13 年からは同地の Hassell studio に移る。

日本と米国の建設業界のいちばんの違い

坂上誠（プロキュアメント・エージェント、2000 年理工学部建築学科卒業）

理工建築学科（半貫研）⇨国内建設会社勤務⇨米国留学⇨米国建設会社勤務

米国大学の新鮮な授業

米国に来てからかれこれ 10 年が経ちました。今、改めて渡米した年を数えてみて、「10 年」という年数に自分でも驚くほどです。学生時代も、アメリカで勉強したいという気持ちはそれほどもっていませんでしたし、そんな自分がまさかこんなに長く海外に住むことになるとは思ってもいませんでした。

大学の時は正直、真面目な学生ではありませんでした。 実際、大学卒業も他の学生よりも１年多くかかりましたし、語学も得意ではありませんでした。同期や先生の中にもきっと、「あの坂上君がね～」と思っている方もたくさんいらっしゃると思います。

私の卒業したワシントン大学のコンストラクションマネージメント学科には、学士・修士・博士コースがあり、私はその修士コースを修了しました。授業の内容はとても新鮮なもので、特に見積りの授業では、実際のプロジェクトの図面・仕様書を利用して仮想の入札を行い、チームごとに入札金額を競い合ったりしました。また、スケジュールの授業では、見積りの授業と同じプロジェクトを使い、工程表をつくり、自分たちでつくった見積りと合わせ、オーナーを演じている講師陣に自分たちのプロポーザルをプレゼンするのです。まさに、これらは卒業後、私がコンストラクションマネージメントの仕事で実際にしていることなので、学生の時に疑似体験できたことは、とてもよい経験となっています。

日本とは違う役割分担

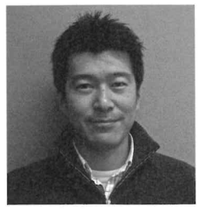
大学卒業後は Turner Construction という、米国ゼネコンのシアトル支社で勤務しています。最初は、Project Engineer というポジションでキャリアを始めました。日本ではあまりないポジションだと思うのですが、こちらでは「現場監督 (Superintendent)」と「Project Engineer」で役割分担がはっきり分かれており、現場監督はスケジュールなど、いわゆる現場の管理を行います。また Project Engineer は施工図のチェック、コスト管理、質疑書の作成などのペーパーワークを担当します。その両方の上に立つのが、Project Manager で、彼らはチームをまとめながらプロジェクト期間中、オーナーとの折衝にあたります。

Project Engineer を経験した後、小規模ながら私も Project Manager の仕事をさせてもらいました。現在では、新たに Procurement Agent というポジションで大規模なプロジェクトの下請業者選定、工事金額や契約書の交渉などを行っています。日本では、購買部という部署でのポジションにあたると思います。

勤務し始めたころは、英語にもまったく自信がなく、下請業者に電話をかけることすら憂鬱でした。しかし自分の完璧でない部分にばかり目を向けるのではなく、自分にしかできないことはなにかを考えるようになり、今では新しい業者との関係を構築していくことや工事金額の交渉も楽しめるようになりました。

日本と米国の建設業界の違いについて、私の現場を経験した上でいえることは、下請業者の質の違いではないでしょうか。日本の業者の方が、それぞれ責任感をもって工事を進めますが、米国の場合は、「そこまで面倒をみなければいけないのか」と思うことが多々あります。これはおそらく、プロジェクトに関わっている人びとの「ものづくり」の意識が、日本の方が強いからではないかと思います。その一方で、アメリカでは、「リスクマネージメント意識の高さ」をスタッフが要求されます。常にプロジェクトに関わるリスクを洗いだし、そのリスクをカバーするためのプランを立てる。その意識がプロジェクトに携わる一人ひとりに徹底されていて、この部分は日本の建設業界でも、もっと取り入れるといいかもしれません。

米国で関わったビルの建設プロジェクト。左はシアトルに建つアマゾン本社が入居予定の「Block 45」、右はシアトルに建つ総合病院の「Harborview Medical Center」



SAKAGAMI Makoto
2000 年理工学部建築学科卒業。同年、田中土建工業に入社し 03 年まで現場監督員として勤務。大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程に入学後、05 年ワシントン大学コンストラクションマネージメント修士課程編入、2006 年修了。同年より Turner Construction Co. にて勤務。

アジアの新興国に惹かれて

三浦洵（大学院生、2011年工学部建築学科卒業）

工建築学科（浦部研）⇨大学院工学研究科建築学専攻⇨インド・School of Planning and Architecture 留学

留学は海外へ出るためのステップ

大学卒業後の進路を考えた時、留学をステップとして海外と関わりたいと考えていました。海外の知見を得、他国を知ること、また、海外から日本を客観的、相対的に俯瞰し、改めて日本という国をとらえてみたい思いが強くありました。一般的に留学といえば米国、欧州、豪州などを指すと考えていましたが、今後の世界情勢を考えた時、潜在的にポテンシャルを有しているアジアを中心とした新興国に心惹かれるものを覚えました。そんな中、工学部のサンジェイ・パリーク先生から助言をいただいた留学先が、BRICSの一国であるインドでした。

インドに滞在する日本人人口は首都デリーでも約5000人といわれており、その中で日本人の留学生の数となるとインド全土でも微々たる数でしょう。そのような国に留学するのに恐らく困難はあると予想するものの、新しいことに取り組める先駆的な機会であると考え、インドへの留学を決意しました。

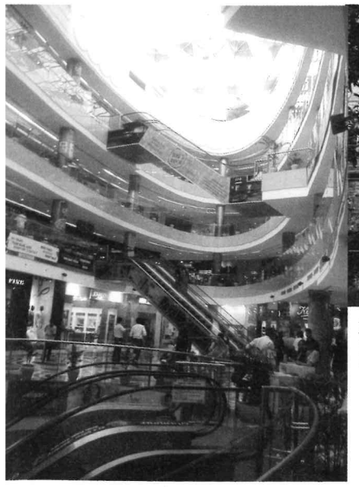
留学先はデリーにあるSchool of Planning and Architectureで、約1年間この大学に研究生として在籍しました。学内では学生たちが自由気ままに階段、芝生、樹木を利用しており、空間を楽しんでいるのが印象的でした。また、卒業設計を閲覧する機会がありましたが、コンセプチュアルなものよりも、構造、素材など、実現性を追求した空間を提案する作品がほとんどであり、国によって卒業設計のニュアンスやスタンスが大きく変わることを感じました。

建築のあり方を改めて考える

留学前半は文献調査や見学を通してインドの建築を学びつつ、後半はインドの住宅やその暮らし方、および温熱環境測定を行うために、インドの西部、北部、南西部沿岸沿の地域を移動する日々が続きました。地域で得られる砂岩、土、木などの素材を用いて気候風土に即したインドの伝統的住宅は、地方に依然多く残っており、中には200年経過している住宅もありました。地域によって設計手法や思想が異なる点でインドの多様性を垣間みることができるとともに、改めて長期にわたる建築のあり方を考えさせられる機会でもありました。

さまざまな都市、地方を飛び回りましたが、インドではどこでも先進国のような建物が建ち始めています。近年のインドの著しい経済発展は建築業界でも如実に表れています。ショッピングモールのような近代的な商業建築や、インフラが完備されたマンションが近年都市部郊外を中心に爆発的に増えており、その成長ぶりを肌で感じとることができます。また、インドではエアコンや鉄筋コンクリートなど新たな設備機器や素材の導入が広がりを見せ始め、街のいたるところに建設中の建物が多く見られる風景は、インド建築の変革の過渡期にあるように思えます。

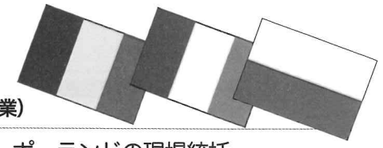
インドの留学は先進国ではみることができない刺激的な日々の連続であり、おかげで精神的にもタフに鍛え上げられたと思います。今後は留学の経験や研究を通して、インドも含めた新興国に携わる仕事に就きたいと考えています。



左／デリーにある近代的なショッピングセンターは、巨大なアトリウムをもち、多くの人たちで賑わっている。上／ケララ州に残る築200年の伝統的住居

MIURA Makoto
2011年日本大学工学部建築学科卒業。11年同大学院工学研究科建築学専攻博士前期課程入学。14年同大学院修了予定。日本大学工学部海外派遣奨学生に選抜され、12年School of Planning and Architecture, Delhi, Indiaに研究生として留学。13年同大学研究生修了。11年、日本大学工学部卒業設計桜建賞、第4回桜門建築会学生コンペティション優秀賞、JIA全国卒業設計コンクール2011に出展。

欧州の建設現場から



岩﨑雅則（現場監督、1983年理工学部建築学科卒業）

理工建築学科（木村研）⇨建設会社で欧州出向・ベルギー、フランス、ポーランドの現場統括

入社7年半で海外異動

最初に海外赴任したのは、1990年末のブリュッセルである。パリ郊外の現場から、ベルギー北部の現場へと、ロンドンの本部で待機していたところで急遽変更になった。卒業のころは海外とは縁遠いタイプで、特に英語が苦手であった。入社して直ぐに現場勤務となり、それまでの学ぶ建築が、実物大で、自分の手でつくる建築となり、寝る暇も惜しいくらいに夢中になった。

7年半も過ぎ、現場マンとして自信過剰になっていたところに海外異動の話があった。徐々にヨーロッパ流も学んでいった。日本では「まあまあ」と丸くおさめようとするところ、なんでもかんでも係争沙汰覚悟で挑まなくてはならない。契約の一語一句を駆使しての応戦である。

5年目からはパリ事務所兼務となり毎週出張となった。その仕事は、凱旋門ロータリーにある建物での国宝指定内装の保全作業であった。築100年前後のホテル全面改修工事など貴重な経験ができた。日本に帰国するときには、3歳だった娘も10歳になり、ベルギーで生まれた長男3歳と次女1歳が増えていた。

躍動の中欧へ赴任

帰国後丸4年で古巣に戻ることになった。ただし次は中欧のポーランドである。連帯による改革から12年経過しようとしている2001年10月。ワルシャワと隣国チェコのプラハに営業所を立ち上げるところからが仕事になった。

日系客先をターゲットにして同業他社に遅れての進出である。実績がものをいう請負の世界では、まったく相手にならない。それでもチェコで自動車工場建設の1工区を担当することになった。工事も順調に進み、プラハ事務所は設立して3年で兼務を終えポーランドに専念することになった。

ポーランドでは先行きが見えてこず、諦めて閉じるかと落胆していたところ、ロンドン本部の上司に「せっかく進出したんだから日系以外の客先を開拓しろ」と発破をかけられた。「求めなければ手に入らない」のだ。

その年に非日系の仕事が2件に、諦めていた日系の仕事も3件の受注となった。その後は順調に、非日系の仕事が8割前後の割合で今日まで継続している。

「ノー」を判断し、相手にいうのが仕事

客先の発注責任者はグローバルである。「ノーと言えない日本人」などといわれたこともあるが、交渉は「ノー」から始まり最後に「ノー」というか、握手をするかである。

一度握手してからでも「ノー」ということもある。米国系歯磨き粉会社

クリスマスマーケットでライトアップされた、人びとで賑わうプラハの旧市街広場

は、発注内示書を出した後に「契約書にはあの条項を復活させたいので呑め」とニューヨークの通勤車の中から一度握手した副社長がいってきた。単純に「ノー」といったら数時間後に内示書の破棄を連絡してきた。途中の交渉は、現地社員がきっちりとまとめてくれるので、「ノー」というかいわないかが私の仕事である。

おおむね握手することが多く軌道に乗り、8年半で一度帰国したのだが、欧州危機の中、昨年の元旦から出直しのために戻り、今またチェコとポーランドを仕事場としている。

＊

最後に印象に残る思い出話をひとつ。数奇な歴史をもつポーランドの戦後は、ナチスから解放されたと思っていたらソビエトに圧制されてしまった。そんな過酷な状況を数多く描いた映画監督のアンジェイ・ワイダ氏に会う機会を得た。監督は大の日本通で、日本の行事によく参加してくれる。天皇訪問を記念して毎年7月に式典が行われるのだが、商工会も招待され監督の映画を鑑賞した。

坂東玉三郎とのコラボで、鑑賞後の監督のあいさつを席で聞いていたら、「商工会長から感想」をと指名されてしまった。突然のことで戸惑ったが「日本でも有名な玉三郎を、今日はポーリッシュ・ビューティで見直した」と返した。ポーランドは美人で有名なお国柄なのである。

海外赴任を始めたときから「塞翁が馬」で転々とし、「多種多様の世界」を西に東に、「ECから拡大EUへ」と時代の流れを間近にみることができた。資産家でもなければ、成功した実業家でもないが、一会社員として数々の貴重な経験をさせてもらっている。海外で桜建の人に出会う機会は少ないが、ぜひ国内の活躍ばかりでなく、海外でも頑張ってもらいたいと願っている。

左／住居の部屋から望むワルシャワ文化宮殿。上／ポーランドを代表する映画監督のアンジェイ・ワイダ氏との記念撮影(2009年7月)。左から、筆者、監督夫人、日本美術技術センター館長、アンジェイ・ワイダ氏

IWASAKI Masanori
1983年理工学部建築学科卒業。鹿島建設(株)入社。建築本部勤務。90年カジマヨーロッパ社出向ベルギー勤務。97年帰国。2001年ポーランド営業所副所長。04年所長。10年帰国。09年在ポーランド日本商工会会長。13年カジマヨーロッパ社出向欧州建設事業統括。現在はプラハ市1区、ワルシャワ市モコトフ区に住居を構える。

研究室紹介

研究テーマ　**実験動物施設の環境制御に関する研究**

研究室名	蜂巣研究室
教員名	准教授・蜂巣浩生
キーワード	実験動物施設／環境制御／飼育環境基準／動物福祉／省エネルギー
企業等への要望	☑共同・受託研究の要請　☑実作・試作等の協力　□研究成果の事業化等　□その他

研究概要

動物実験には実験精度の信頼性・再現性が厳しく求められるため、実験に供される動物の遺伝的・微生物学的統御だけでなく、飼育環境にも厳密な統御が要求されます。実験動物には飼育環境の温・湿度だけでなく、気流・気圧・粉塵・臭気・照明など多くの環境要因が複合的に影響を及ぼします。そのため多大な空調エネルギーが消費される結果となり、省エネルギー対策が大きな課題となっています。また、実験動物への動物福祉的配慮も必要ですし、研究者や技術者の労働安全衛生にも気を配らなくてはなりません。当研究室では、このような実験動物を取り巻くさまざまな課題について、多方面から総合的にとらえ、その関連性を考慮しながらそれぞれの課題に適切な答えをみつけるべく研究に取り組んでいます。そして、日本の技術力を背景に、世界に向けて「実験動物施設の環境基準」を発信していきたいと考えています。

連絡先◎理工学部建築学科 駿河台校舎5号館7階　TEL 03-3259-05887　E-mail hachisu@arch.cst.nihon-u.ac.jp

研究テーマ　**環境デザインの計画的方法論の研究**

救急医療システムによる生命環境モデルの構築、都市・地域再生プロセスとユニバーサル・エコロジカルデザインの実践

研究室名	大内研究室
教員名	教授・大内宏友
キーワード	地域・都市／景観／救急医療／生命／漁村・漁協／GIS／UD／色彩と認知
企業等への要望	☑共同・受託研究の要請　☑計画・設計等の協力　☑研究成果の事業化等　☑その他(復興計画など)

研究概要

研究室は1992年に開設。人びとが安心して快適に暮らせる、より市民生活に密着した地域・街づくりを念頭に人びとが主体となり、人と人、人と自然、人と社会が相互に豊かな関係性をもちつつ人間性豊かな地域(地球)環境を創出すべく、地域の生活環境・文化の発展・向上に向け研究および企画・計画・設計の実践を行っています。

これまで、昭和学院新キャンパスの全体計画の構築(写真)や救急医療システムの施設適正配置、また防災・減災へ向けた提案を行うなど、生命を育む社会に向けた生命環境モデルの提案をしています。設計提案は国内外の設計コンクールにて、日本建築学会最優秀賞をはじめ、IFHP国際都市デザイン学生コンペで世界2位を2度(11回2003年、12回2005年)受賞、2010年「Helping Haiti Restructure 仮設住居」入賞、他国内外の受賞は多数あります。

また、研究成果は複数の国際学会にて発表し、国際的な学術的知見の交換を継続的に行っています。昨年は学術論文で、これまでの研究成果のひとつである景観認知に関する大内宏友との共著論文で2013年日本建築学会奨励賞を、当研究室出身の山田悟史君(現・立命館大学助教)が受賞しました(P15の記事参照)。今後とも研究と設計・計画との実践の往復作業を進めていきます。

大内研究室で全体計画を行った昭和学院新キャンパスの鳥瞰

連絡先◎生産工学部建築工学科 津田沼キャンパス4号館2階　TEL 047-474-2483　E-mail oouchi.hirotomo@nihon-u.ac.jp

斎藤賞・加藤賞・桜建賞　平成 25 年度受賞者一覧＊受賞作品の紹介は次号に掲載いたします

斎藤賞

田中元規（理工学研究科建築／修士論文）
「床衝撃時における乾式二重床構造の伝達加振力の予測計算方法」　指導／教授・井上勝夫

宮田敦典（理工学研究科建築／修士論文）
「コンクリートポンプ工法におけるコンクリートの品質変化および管内圧力に関する研究」　指導／教授・中田善久

茂木大佑（生産工学部／修士論文）
「簡易耐震補強された木造住宅の地震応答解析」　指導／教授・神田亮

薄井謙（工学部／修士論文）
「ローマ市の街路空間における探索歩行時の注視に関する研究」　指導／教授・三浦金作

加藤賞

杉本太一（理工学研究科海洋建築工／修士論文）
「高強度長方形断面 CFT 柱の圧縮性能に関する実験的研究」
指導／教授・中西三和、准教授・北嶋圭二、安達洋

高山淳平（理工学研究科海洋建築工／修士論文）
「避難誘導のための津波ハザードマップ開発に関する研究」
指導／教授・増田光一、准教授・居駒知樹、助教・惠藤浩朗

村田一城（理工学研究科海洋建築工／修士論文）
「港湾内における浮体式桟橋を用いた船舶の津波被害低減法に関する基礎的研究」
指導／教授・増田光一、准教授・居駒知樹、助教・惠藤浩朗

桜建賞

宮本悠平（理工学部建築／卒業論文）
「ケーブルを用いたスポークホイール型観覧車の基本的構造特性に関する研究」
指導／教授・岡田章 、准教授・宮里直也

田部菜津子（理工学部建築／卒業論文）
「試験方法の違いによるコンクリート供試体の体積ばらつきに関する研究」　指導／教授・中田善久

榎本巽、庄司綾（理工学部建築／卒業論文）
「床仕上げ材の違いによる歩行感覚評価の検討」指導／教授・井上勝夫、助教・冨田隆太

出口順平（理工学部建築／卒業論文）
「家具デザイナー・水之江忠臣のデザイン活動に関する研究 ―戦後日本の家具デザイン史における位置づけ―」
指導／教授・大川三雄

小笠舞穂（理工学部建築／卒業設計）
「在り触れる美術館」　指導／准教授・佐藤慎也、助手・二瓶士門

田中悠貴（理工学部建築／卒業論文）
「「サブリース事業」による歴史的建造物の空き家活用に関する研究」
指導／准教授(まちづくり工学科)・川島 和彦

津端里佳（理工海洋建築工学科／卒業論文）
「都市の水辺を活用した小学校における環境教育に関する研究　- 東京都江戸川区を対象として -」
指導／教授・畔柳昭雄、准教授・坪井塑太郎

菅野裕識、早坂祐貴、堀内栄治（理工学部海洋建築工／卒業論文）
「津波漂流物の衝突を想定した部材の挙動に関する基礎的研究　- その２弾性部材を対象とした錘の衝突実験 - 」　指導／教授・中西三和、准教授・北嶋圭二

一瀬祐介、大川峻（理工海洋建築工学科／卒業論文）
「PC 構造の復元力特性に関する研究その 1」　指導／教授・浜原正行

山口徹（生産工学部／卒業論文）
「歴史的建造物の維持保全に関する研究」　指導／准教授・永井香織

岡修平、菊池 利央（生産工学部／卒業論文）
「長方形 CFT 柱の繰り返し曲げ性状に関する研究」　指導／准教授・藤本利昭

遠田拓也（生産工学部／卒業論文）
「一農村集落の「集い」にみる「助け合いコミュニティ」形成に関する研究」　指導／准教授・篠崎健一

遠田拓也（生産工学部／卒業設計）
「のりしろ 大学横丁」　指導／准教授・篠崎健一

齋藤範明（生産工学部／卒業設計）
「受け継がれる石」　指導／准教授・篠崎健一

小林拓也（工学部／卒業設計）
「聴衆の誕生 ―音・楽の器―」　指導／准教授・浦部智義

栗原弘樹、齋藤柾紀、佐藤直人（工学部／卒業論文）
「トラス構造の形状とその地震動応答性状に関する研究」　指導／教授・倉田光春

横山貴史（工学部／卒業論文）
「セメント系高密度材料の γ 線遮蔽性能実験及び基礎的性質の検討」指導／准教授・サンジェイ・パリーク

佐藤いちか、守岡優里（工学部／卒業論文）
「小学校のオープンスペースにおける家具の設えに関する研究」　指導／専任講師・市岡綾子

鈴木翔子（工学部／卒業論文）
「神社建築における造形と装飾手法に関する一考察　- 近世福島県の事例を中心にして - 」
指導／助教・大山亜紀子

木村肇（短期大学部／卒業設計）
「PILLAR CHURCH　- 海浜幕張カトリック教会 - 」　指導／教授・田所辰之助

太齋光（短期大学部／卒業論文）
「擁壁に関する研究　- 主働崩壊形状観察実験 - 」　指導／准教授・佐藤秀人

事務局だより

平成 26 年度の桜門建築会総会のご案内

会場案内図／ JR 御茶ノ水駅、地下鉄丸ノ内線お茶の水駅、地下鉄千代田線新御茶ノ水駅より、徒歩 5 分程度

来たる 5 月 28 日 (水) に平成 26 年度の桜門建築会総会を、東京ガーデンパレスにて開催いたします。

会員の皆さまは、どなたでもご出席できますので、どうぞふるってご参加ください。なにかご不明な点がございましたら、HP をご覧いただくか、下記事務局までお問い合わせください。

新入特別維持会員のご紹介

新規入会者　氏名／卒業年／勤務　（平成25年11月11日～平成26年2月10日）　4 名

大川 誠　　理工建 -H3　大成建設 (株)
村島聡乃　　生産工 -62　(株) ムラシマ事務所
伴中信英　　生産工 -H3　春日建設 (株)
野島秀仁　　理工建 -H3　鹿島建設 (株)

e ラーニング資格講座を特別価格でご提供！

当会では会員サービスの一環として、特別価格の e ラーニング資格講座を、ご提供しています。講座は、建築系資格試験の合格実績で定評のある日建学院です。受講料は、桜門建築会のために下記のような会員価格となっていますので、ぜひ、ご活用ください。

詳細・申込みは **http://okenkai-ex.jp/**

1 級建築士 通常 315,000 円⇒会員特価 145,000 円
2 級建築士 通常 315,000 円⇒会員特価 135,000 円
宅地建物取引主任 通常 105,000 円⇒会員特価 78,000 円

桜建会報　NO.99 2014-March
発行人　岩井光男
編　集　桜門建築会広報委員会
〒101-8308　千代田区神田駿河台1-8-14
日本大学理工学部内

広報委員会
委員長　佐藤慎也 (理工学部建築学科)
副委員長　塩川博義 (生産工学部建築工学科)
大川三雄 (理工学部建築学科)
委員　山本和清(理工学部海洋建築工学科)
亀井靖子(生産工学部建築工学科)
ブンタラ・S・ガン (工学部建築学科)
矢代眞己 (短期大学部建築・生活デザイン学科)
大西正紀 (mosaki)
北川健太 (sekai)
西山麻夕美 (フリー編集者)

桜建会事務局
住所・所属の変更、クラス会の開催、投稿、会費、名簿など桜建会全般についてお気軽にご連絡、お問い合わせください。
理工学部5号館7階574A号室
TEL03-3259-0649　FAX03-3292-3216
E-mail kaiin@okenkai.jp
ホームページ http://www.okenkai.jp/
専任／星野麻衣子
非常勤／櫻井佐和、大木明子
業務時間／AM10:00～PM5:00(月～金)

学部ニュース

工　トピックス

◎齋藤俊克助教は、2013 年 7 月 9 ～ 11 日に開催されたコンクリート工学年次大会 2013(名古屋) で、第 35 回コンクリート工学論文会年次論文奨励賞を受賞した。本論文は、査読で高い評価が得られた論文 (採択論文 589 編中の 17 編) のひとつとして、コンクリート工学誌 10 月号に掲載されている。

◎浦部智義准教授と浦部研究室が計画・設計・建設に関わったログハウス仮設住宅群が世界建築「WORLD ARCHITECTURE」13 年 8 月号 (N0.278) の特集「Wooden Temporary Housing Group、Building with Log Construction using Fukushima's Cedar」に掲載された。

◎ 10 月 18 日、せんだいメディアテークで開催された第 17 回 JIA 東北建築学生賞 (主催／日本建築家協会東北支部) で、13 校 15 学科、応募総数 37 作品中、樋口卓史君 (浦部研 4 年) の「都市の茶の間 - 集落的建築 -」が優秀賞、星陽太郎君 (速水研 4 年) の「修験道資料館 - 見る・歩く・感じる -」(P16 に画像掲載) が奨励賞 (東北専門新聞連盟賞) を受賞した。

◎中谷哲郎君 (土方研 M1) は、10 月 26 日、日本造園学会東北支部より、ポスターセッション表彰式で奨励賞を受賞した。

◎阿部圭君 (若井研 M2) は、10 月 27 日、京都女子大学で開催された日本インテリア学会第 25 回大会で、優秀論文 3 編に選ばれ表彰された。

◎若井正一教授は、11 月 3 日、白河市の文化功労者表彰において自治功労賞を受与された。

左／ JIA 東北建築学生賞を受賞した学生たち。上／プレゼンボードの前に最優秀賞を受賞した樋口君

理工　建築学科トピックス

◎「船橋市ふなばし三番瀬海浜公園活用基本・実施設計委託公募型提案競技」にて、「今村雅樹教授 + 山﨑誠子短大准教授 + 今村研究室 (M2 ／山本匡希、町田昂弘、M1 ／金子祐弓)」が二次審査で 2 位となった。この設計プロポーザルは、環境保全と再生を目的とした環境学習施設の提案がテーマ。東京湾三番瀬にある既存温水プールのコンバージョンと海岸の環境デザインを設計するものだった。

◎「第 2 回大東建託 賃貸住宅コンペ」(主催／大東建託) において、山井翔太君、奥富大樹君 (山中研 M1)、杉本将平君 (2011 年度卒／工学院大学大学院) が審査員特別賞、森田秀一君、小杉真一郎君、宇田百孝君 (3 年) が学生特別賞を受賞した。新たな「賃貸住宅」を考えるというテーマに対し、557 点の応募があった。

生産工　トピックス

◎櫻田智之教授の最終講義「資源の循環と再利用 - 木材とコンクリートの世界 -」が、昨年の 12 月 13 日に本学部で行われた。内容は、北欧での大規模木造建築の調査、再生骨材と溶融スラグの再利用に関する研究が中心で、会場には多くの学生・卒業生が集まった。45 年と 9 か月にわたって構造力学の講義を担当し、学生の研究指導などで、本学科に貢献されました。本当にありがとうございました。

◎ 2013 年日本建築学会奨励賞を、山田悟史君 (立命館大学助教、2009 年大内研究室博士後期課程修了) が受賞した。対象論文は、大内研究室のこれまでの研究成果のひとつであり、大内宏友教授との共著論文の「鎌倉の景観認知に関する研究」「Study on Landscape Recognition that Uses ImageProcessing Technology by Local Inhabitants in Kamakura<http://www.aij.or.jp/jpn/design/2013/pdf/115_2013award_yamadaS.pdf>」である。

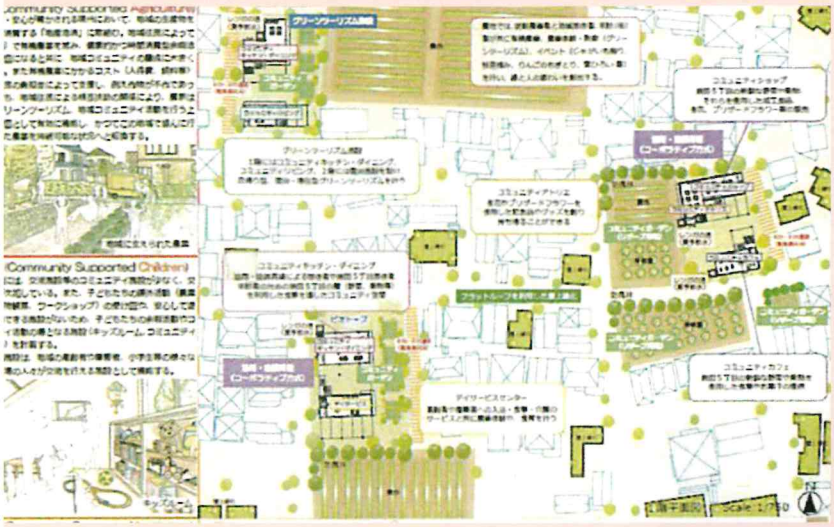
最終講義の教壇に立つ櫻田智之教授

生産工 トピックス

◎2013年度日本建築学会関東支部第15回提案競技「美しいまちをつくる、むらをつくる」で、川岸梅和教授、野田りささん(D3)、小林拓人君(M1)、樋口咲子さん(M1)、菊地啓太君(M1)の「共に生きる・活きる暮らし」が最優秀賞を受賞し、大内研究室の渡邊啓生君(M1)、宍倉百合奈さん(3年)の「次世代へ繋げる農」と北野研究室の三成俊輝君(4年)の「都市の団欒を育む ー農路地の提案ー」が佳作に入選した。

◎2013年11月23日静岡県焼津市花沢の里で行われた市民講座(主催／公益社団法人 静岡県建築士会中部ブロックまちづくり委員会)で、本学部の渡辺康教授、篠崎健一准教授が伝統文化保存地区指定に向けて意識を高めることを目的に講演した。地元の高校生や住民に向け、環境の豊かさについて話すとともに、花沢のまちの素晴らしさについて語り合った。

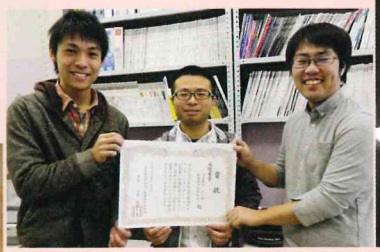
焼津市花沢の里で行われた市民講座



最優秀賞を受賞した「共に生きる・活きる暮らし」のプレゼンテーションの一部

JIA東北建築学生賞で奨励賞を受賞した星君の作品「修験道資料館 -見る・歩く・感じる-」

工 トピックス

◎茨城県笠間市で開催した「笠間稲荷門前通りポケットパークデザインコンペ」において、古俣甲太郎君、前田建都君、三代川昌礼君(市岡研4年)の「和」が最優秀賞を受賞した。作品は、笠間朱をベースに周辺と調和する「和」を強調。格子を活用した案内板の取りつけなど、実現性の高い提案として評価された。

右／「和」のスペースの全体を表現した模型。中／賞状を手にする受賞者。左から古俣君、前田君、三代川君。左／コンペで提出した模型やプレゼンテーションボード